R2.4月16日 いはらき新聞

知名度向上へ奔走

郷土の誇り

先駆者

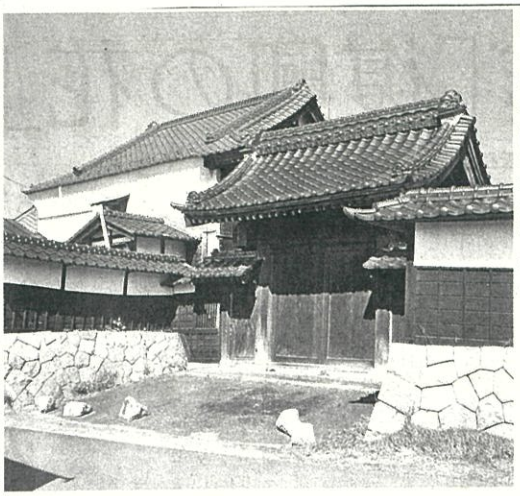
長久保赤水「重文指定」

■下■

講演や銅像、陶板建立も

「赤水先生の業績をなんとか『国指定』にしたい思いがあった」。

国の文化審議会は3月19日、長久保赤水の関係資料を国の重要文化財（重文）に指定するよう萩生田光一文部科学相に答申。夏ごろまでに指定される。1992年に設立し、赤水の功績を伝える活動に取り組んできた長久保赤水顕彰会の佐川春久会長(70)は、悲願だった目標の達成を喜ぶ。



「長久保赤水記念館」として活用する構想がある屋敷＝高萩市赤浜

「すごいことをやったのに赤水はあまり世に知られていない。非常にもったいない」との思いを強く持つ。2012年に会長に就任して以来、赤水の知名度向上のためさまざまな事業の実現に奔走し続けてきた。

伝記漫画や書簡集などの発行、赤水図のレプリカ作成、ゆかりの地を巡るウオーキング会、講演などやれることは何でもやった。日本地図学会との連携も進めている。

▽地域資源に

赤水一族の一部の子孫は今も高萩市に暮らすほか、赤水関連の史跡や施設が市内に点在する。

赤水の墓は潮騒が聞こえる海沿いの林の中に立つ。同会会員や市民有志による実行委員会は2012年、JR高萩駅前の広場に赤水の銅像と赤水図の陶板を建立した。子孫から「現在使っていない屋敷を赤水のPRに活用してほしい」との打診があったため、今後、市と調整しながら「赤水記念館」として改修していく構想もある。

長久保赤水の功績を後世に伝えるため活動を展開する佐川春久さん＝JR高萩駅前

佐川会長は、同市が赤水を生んだ地であることをPR材料とし、これらの史跡や施設を資源として活性化に生かしていくべきだと考え、市にも提案を重ねている。

▽後世へ伝える

重文指定で「国民の財産になった」（佐川会長）ことを好機とし、同会は今後も積極的に事業を展開していく。

幕末の思想家、吉田松陰も赤水図を重宝したと考えられることから、松陰が東北での旅について書き記した「東北遊日記」の足跡を記載した赤水図のレプリカを制作する予定。現在、インターネットで資金を募るクラウドファンディングで支援を求めている。

佐川会長は、市内の小学生がテレビ番組のインタビューで「赤水は街の誇りです」と答えていた姿がうれしく、印象に残っている。

「茨城が生んだ世界に誇れる先人の一人」。赤水の功績、そして努力を惜しまず人のために働いた生き様を永く後世に伝えていくため、佐川会長と同会会員たちの活動は続く。

（この連載は日立支社・小原瑛平が担当しました）